

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02179

研究課題名（和文）20世紀哲学における 欲望 概念の解明とその実践的意義についての考察

研究課題名（英文）On the ideas of desire in the 20th century philosophy

研究代表者

越門 勝彦 (Koemon, Katsuhiko)

明治大学・法学部・専任准教授

研究者番号：80565391

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19から20世紀のフランス哲学において欲望概念がいかに規定されてきたかの解明を試みた。その結果明らかになったのは、20世紀哲学における欲望概念が行為者論や倫理学の領域にまで広がりを持つに至ったという事実である。19世紀の哲学者メヌ・ド・ビランは意志との対比を通じて欲望の偶然性・被決定性を強調したのに対し、モーリス・ブロンデルやジャン・ナベールは欲望の能動的、創造的側面に注目し、個人が善く生きようとした他者との和解や正義を実現しようとするその倫理的な推進力を欲望と規定したのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀思想における欲望概念の考察はこれまで主に消費社会論や精神分析の文脈でなされてきた。これに対し本研究は、メヌ・ド・ビランにまで遡って19世紀の概念規定を確認したうえで、20世紀におけるその後継たるフランス反省哲学者のうち新たに倫理的推進力としての欲望概念を見いだした。この研究の意義は、ブロンデルとナベールの思想に注目することで、20世紀の欲望概念がこれまで言及されてこなかった領域へも拡張していることを示した点にある。研究成果は学術論文のみならず、書籍（『現代フランス哲学入門』）の形で公刊されたので、欲望に関心を持つ一般の読者にとってもアクセス可能である。

研究成果の概要（英文）：We have researched how ideas of desire have been interpreted and defined in the 19-20th century French philosophy. Our research made it clear that in the late 20th century this idea was expanded into areas of ethics and agency theories.

Maurice Blondel and Jean Nabert, whose moral theories our studies are focused on, were onto positive and creative functions of desire, and thus defined its nature as 'ethical' motive power. This ethical power drives individuals to lead a good and reflected life or to realize social justice and reconciliation among them. We compared their theories on desire with the one of Maine de Biran, the 19th century philosopher. Biran made an emphasis on the fact that instinctive desires move human beings and turn them into passive existence, distinguishing it from autonomy of the will.

研究分野：哲学

キーワード：欲望概念 行為者の自己知 メヌ・ド・ビラン ジャン・ナベール

1. 研究開始当初の背景

日本語で日常的に用いられる「欲望」という言葉は、理性的な判断を阻害する攪乱要因、という否定的なニュアンスを伴う。だが、フランス語の *désir* がそうであるように、愛、希望、好奇心などが共有する 或る目標へと向かわせる力 を欲望 と定義するならば、それは、人間らしい行動を説明・理解するうえで不可欠の要素である。この広い意味での欲望 は西洋哲学史に伏流する隠れた重要主題であり、20世紀後半以降、その重要性が一層強く認識されるに至っている。

欲望 は哲学史において重要テーマであり続けたが、大陸系の観念論哲学と英語圏の経験論哲学とでは欲望 をめぐる問題意識や欲望 概念の規定そのものが異なっており、20世紀の欲望論は、そのいずれを継承するかによって、方向性や着眼点に違いが生じている。

大陸系哲学の先駆者デカルトは、疑い得ない確実なものを希求する中で自らの 欠如 を自覚する経験に基づき、人間に己の有限性を自覚させると同時に無限性の次元へと導くという欲望の役割を見出した。他方、デカルトの同時代人スピノザは、欲望のうちに価値秩序を創出・維持する力を認めた。この肯定的理解を現代に引き継ぐドゥルーズは、社会の本来の機能を、欲望の抑圧ではなく、欲望を組織化し規則的かつ集団的な利益を生産する点に見出した。欲望論のこうした展開を受け、近年のフランス哲学研究では、認識や行動を拡張していく原動力、あるいは個人を他者や社会に接続する媒介、としての側面を重視する解釈がますます優勢となっている。

一方、英語圏では、イギリス経験論者ヒュームの主張(「行為の動機づけの究極の源泉は欲望にある」)を批判的に検証するという課題が共有され、行為の動機づけ要因としての欲望の役割が、義務、価値、感情など他の諸要因との関連のもとで考察されている。たとえば M. ストッカーは、倫理における感情の機能に対する問題関心から、感情、価値、欲望の三項の関係性を詳細に分析している(Valuing Emotions, 1996)。また、M. プラッツは、欲望 の概念を「際立って広範囲の哲学的議論において中心を占める」(Moral Realities, 1991, p.8)と評価した上で、それに付きまってきた誤解を払拭して新たに妥当な定義を与え、その定義に基づいた「価値の一般理論」の確立を目指している。

2. 研究の目的

本研究は、対象とする時代を20世紀に限定する一方で、現象学を中心とするフランス現代哲学と英語圏の分析哲学という、方法論が異なる研究分野を横断し、欲望 概念を幅広く調査する。その際、両分野の着眼点や問題意識の微妙なずれをむしろ積極的に利用し、欲望 という人間に固有の能力を、可能な限り包括的かつ体系的に把握する。

具体的な目標としては、20世紀の哲学者が行動実践のどのような局面を説明するために欲望概念が不可欠だと考えたのかをまず明確にする。さらに、彼らの思考の影響関係や対立関係の整理を通じて、20世紀の哲学的欲望論の包括的かつ体系的な理解を目指す。

課題は大きく分けて次の二つである。

① 欲望 *desire, désir* を、「欲求 *need, besoin*」、「意志 *will, volonté*」、「感情 *emotion*」から区別する

これら三種の心的作用と欲望との共通点ならびに相違点の説明には、各哲学者の欲望概念の特徴が自ずとあらわになるはずである。同時にそこでは、人間の実践行動のなかでも、欲求、意志、感情だけでは説明のつかない局面が示されると期待される。まず欲求に関しては、その対象が生存に直接かかわるものに限定されているのに対し、欲望する能力は生命的関心よりも広い。この違いを掘り下げる必要がある。意志との区別においては、行動の動機づけ要因としての両者の役割の違い(長期間に及ぶか否か、など)に注目する。感情との関係については、欲望は多くの場合何らかの感情として経験される事実を踏まえ、感情と欲望はそれぞれ独立した心的作用として分離しうるか否かを問う。

② 実践的諸領域(倫理、宗教、精神分析)を根拠づける欲望 の諸性質を規定する

20世紀哲学によって解明された欲望 に固有の諸性質に注目し、その詳細な規定を試みる。焦点を当てるのは、過剰性と記号的性格 の二つである。過剰性 とは、たとえば、ナベールが「神の欲望」と呼ぶ、現行の社会秩序を維持する以上の「正しさ」を妥協なく要求する性質や、レヴィナスの「形而上学的欲望」に内在する、他者に対する責任を無限に引き受けようとする傾向のことである。記号的性格 とは、リクールが自らのフロイト論で明らかにした、欲望は別の何かによって意味されるがゆえに解釈を要求する、という性質を指す。この性質こそが欲望の「意味論」を要請する。過剰性 は倫理や宗教のある次元を根拠づけるものであり、記号的性格 は言語化と解釈という精神分析の方法論を規定しており、いずれも重要である。

このように多様な観点から 欲望 を捉えることで、行動の動機づけの一要素として 欲望 が果たすべき役割について、事実 に即した適切な理解が得られると思われる。

3. 研究の方法

二つの課題の遂行のために、それぞれ次のような方法を取ることにした。

・英語圏で研究の盛んな感情の哲学 philosophy of emotion (あるいは哲学的心理学 philosophical psychology) の分野において、行為を動機づける一要素としての 欲望 の特性が、感情との対比を通じてどのように規定されているかをサーヴェイする。この分野では、感情が担う「価値づけ」valuing 機能に注目が集まっているので、行為を導く感情的価値評価への 欲望 の関与についても洞察を深めるよう努める。

・行為者性 agency 論の代表的論者であるフランクファートとブラットマンは、自律や人格などの概念を軸に行為者性の成立条件を考察しているが、そうした議論の中で、欲望 の役割がどのように位置づけられ、また、意志の役割との相違点はどのように説明されているのかを詳しく調べる。欲求と 欲望 の分離を正当化する論理をレヴィナス哲学のうちに探り、その妥当性を吟味する。

・すでに開始しているナベール『神の欲望』の読解を継続し、欲望 の<過剰性>が神の観念や宗教的实践をどう根拠づけうるかを考察する。それに加え、レヴィナスの「形而上学的欲望」と「他者 Autrui」概念の関係に注目し、功利主義や義務論に回収されない倫理的次元(他者倫理)の内部にこの「形而上学的欲望」をしかるべく位置づける。その際、「倫理的暴力」の概念に依拠してレヴィナス批判を展開しているJ.バトラーの『自分自身を説明すること』を参照し、過剰性 が一種の暴力に転化する可能性についても検討する

・リカールのフロイト論に取り組み、解釈学の立場から規定される 欲望 の「記号的性格」を明らかにする。欲望 はそれ自体とは別の何か(たとえば夢)によって意味されるので、解説すべき対象として存在する、というリカールの理解に対しては、欲望 それ自体が何らかの仕方 で経験される必要はないのか、と問いかける。欲望 それ自体の経験様態を主題化しているサルトルの『存在と無』さらに、フロイトの抑圧概念を批判する文脈で 欲望 の経験様態について考察しているM.アンリの『精神分析の系譜』に注目する。

意志と欲望の区別を研究する過程で、19世紀の哲学者メーヌ・ド・ピランによる意志や覚知 aperception についての考察が、行為者性論、自己知論、認知科学や心理学など諸領域の問題の解明に重要な寄与をなしている可能性に気づいた。そのため、2020年度より、課題) については、ピランと英語圏の行為者性論・自己知論との関連を探る方向へシフトした。

また、課題) に関して、精神分析における欲望概念の包括的研究は断念し、2020年度以降は、リカールとM.アンリのマルクス解釈における対立に注目し、「生ける個人」が抱く欲求を両者がどのように捉えているかを明らかにすることに努めた。

4. 研究成果

主な研究成果は2020年度と22年度に集中している。

2020年度

7月に『現代フランス哲学入門』を公刊した。編著者として、「20世紀総論」、「メーヌ・ド・ピラン」、「ブロンデル」、「マルセル」、「ナベール」、「ミシェル・アンリ」の項目を執筆した。

これらのうち、「ピラン」項目では、欲望と意志の差異について論じており、これは、交付申請書の「研究目的」ならびに「研究実施計画」に掲げた課題()「欲望 desire, désir」を「欲求 need, besoin」、「意志 will, volonté」、「感情 emotion」と区別する」に取り組んだ成果と位置づけられる。また、「ブロンデル」項目では、英語圏の行為論とブロンデルの名著『行為』の体系的理論が補完し合う可能性に触れており、これは、「英語圏の分析哲学と現代フランス哲学という異なる研究領域を架橋する」という「研究目的」を達成したものとなっている。さらに、「ナベール」の項目では、「正当化の欲望」というナベール独自の概念が、悪の問題を考える上で有効であることを論じられているが、その内容は、規範の普遍妥当性に依拠する倫理学の限界と、宗教的次元の導入の必然性とを指摘するものである。これは、課題()「実践的諸領域(倫理、宗教、精神分析)を根拠づける 欲望 の諸性質を規定する」に対して直接的な回答となっている。「アンリ」項目では、「自己触発」の概念を分析し、感情の変化に固有の因果性について論じた。これは、上記の課題()に含まれる感情の特性を主題とした考察となっている。

2022年度

当該年度の成果は大きく二つに分けられる。

一つは、マルクス解釈をめぐるミシェル・アンリとポール・リクールの対立をテーマとするものである。この論考は、『アンリ読本』所収の「アンリとリクール アリーナとしてのマルクス解釈」において発表した。『マルクス』で展開されたアンリの解釈は、欲求や苦しみなど「生ける個人」の「自己感受」の現実的経験を起源として、階級や分業といった中心概念のイデオロギー的性格を生成論的に解明しようとする点に特徴がある。これに対し、リクールは、1970年代に取り組んでいた分析的行為論から得た知見と独自のイデオロギー研究を踏まえ、アンリによる「活動」と「イデオロギー」概念の解釈の不十分さを指摘した。本研究は、マルクス解釈を媒介として、20世紀フランスを代表する二人の哲学者の根本的な対立を明らかにした点に獨創性がある。

もう一つの研究成果は、行為者の自己知をテーマとするものである。行為における身体運動という要素に注目し、運動の遂行が「(行為者にとっての)自分がなしていることについての知」の成立をどのように条件づけているかを考察した。まず、20世紀英語圏の行為と行為者の哲学に加え、自己意識 self-awareness、自己知、身体所有感 bodily ownership をめぐる最新の研究を幅広く調査し、身体運動を通じた自己知の成立という問題への三つのアプローチを種別化した。次いで、その中の一人称的視点を重視するアプローチとメーヌ・ド・ピランの認識論との親和性を指摘し、ピランが展開した統覚理論の適用によりこのアプローチを拡充しうることを示した。成果は論文にまとめ(「行為の中の身体運動 ー行為者の自己知をめぐる問題とメーヌ・ド・ピラン」)、『哲学雑誌』の公募論文に応募した。(採否の結果通知は6月末の予定。)

参考文献

M.Stocker & E.Hegeman, *Valuing Emotions*, Cambridge, 1996

M.Platts, *Moral Realities :An Essay in Philosophical Psychology*, Routledge, 1991

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 KOEMON, Katsuhiko | 4. 巻 557 |
| 2. 論文標題 La Dialectique entre l’Affirmation Originnaire et la Reflexion chez Jean Nabert -Une Source de l’Interpretation Ricoeurienne de l’Attestation | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 明治大学教養論集 | 6. 最初と最後の頁 1-12 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 朝倉 友海 | 4. 巻 70 |
| 2. 論文標題 意味理論の別の可能性：ドゥルーズと可能世界意味論の交錯 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 神戸外大論叢 | 6. 最初と最後の頁 67-85 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 朝倉友海 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 行為的自己の論理 牟宗三と西田幾多郎の比較を通して | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 国際禅研究 | 6. 最初と最後の頁 7-29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 朝倉友海 | 4. 巻 68 |
| 2. 論文標題 場所的論理の形成期における意味の問題 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 神戸外大論叢 | 6. 最初と最後の頁 161-180 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 竹内聖一 | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 アンスコムはデイヴィッドソンとどこで分かれたのか 論文「行為の一般性と個別性」を読む | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『行為論研究』 | 6. 最初と最後の頁 33 - 44 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件)

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 朝倉 友海 |
| 2. 発表標題 西田がいう論理とは何か |
| 3. 学会等名 哲学会大会シンポジウム (招待講演) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 朝倉 友海 |
| 2. 発表標題 Will and action in Nishida's philosophy |
| 3. 学会等名 東亞倫理學 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 朝倉 友海 |
| 2. 発表標題 Nishida Kitaro and Mou Zongsan on the logical genesis |
| 3. 学会等名 International Society of East Asian Philosophy (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 朝倉友海 |
| 2. 発表標題 関数論と可能世界：歴史的観点から |
| 3. 学会等名 RIMS研究集会「数学史の研究」（京都大学数理解析研究所） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 朝倉友海 |
| 2. 発表標題 言葉を用いること・ものを考えること |
| 3. 学会等名 コモンストーク（神戸市立外国語大学） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 朝倉友海 |
| 2. 発表標題 従牟宗三天台学的観点看西田幾多郎の禅哲学 |
| 3. 学会等名 Chan-Zen-Seon 禅的形成及其在世界的展開（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 朝倉友海 |
| 2. 発表標題 スピノザ・ヘーゲル関係再考：数理思想的観点から |
| 3. 学会等名 京都ユダヤ思想学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 朝倉友海 |
| 2. 発表標題 田辺元の複素函数論の射程 |
| 3. 学会等名 RIMS共同研究「数学史の研究」京都大学・数理解析研究所 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 朝倉友海 |
| 2. 発表標題 Sense and event in the logic of place |
| 3. 学会等名 International Association of Japanese Philosophy (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 越門勝彦 |
| 2. 発表標題 感情に含まれる価値認識 ジャン・ナベールの倫理学を手がかりに |
| 3. 学会等名 東北哲学会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名 越門 勝彦 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 408 |
| 3. 書名 現代フランス哲学入門 | |

| | |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 朝倉 友海 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 筑摩書房 | 5. 総ページ数 301 |
| 3. 書名 世界哲学史 8 現代 グローバル時代の知 | |

| | |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名 越門 勝彦 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 442 |
| 3. 書名 現代フランス哲学入門 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 越門勝彦、朝倉友海、松永澄夫、木田直人、渡辺誠、伊多波宗周、伊東俊彦、大西克智、佐藤香織、高橋若木、手塚博、中真生、原一樹、吉田善章 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 中央公論新社 | 5. 総ページ数 700 |
| 3. 書名 哲学すること 松永澄夫への異議と答弁 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|----------------------------------|----|
| 研究分担者 | 竹内 聖一 (Takeuchi Seiichi) (00503864) | 立正大学・文学部・准教授 (32687) | |
| 研究分担者 | 朝倉 友海 (Asakura Tomomi) (30572226) | 東京大学・教養学部・准教授 (12601) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|